



現場の暗黙知をAIの知能に変える！

AI Readyなデータ基盤構築とは

～生成AI・RAG時代を見据えた設計の勘所～

本日のアジェンダ

1 生成AI・RAG導入が直面する「理想と現実」

2 「AI Readyなデータ基盤」への第一歩

3 実装・定着化に向けた「3つの論点」

4 アンケートと個別診断のご案内

本資料がおすすめの方



社内で生成AIやRAGの活用検討は進んでいるものの、「精度が上がらない」「データが使えない」と壁を感じている方に向けて、AIが真価を発揮するための「AI Readyなデータ基盤」の作り方を、ビジネス視点でお伝えします

ターゲット

生成AIの全社展開を目指すDX推進担当者
データ基盤構築に悩む事業企画・情報システム担当者

目的

どの業務から手を付け、どう業務知識を体系化すべきかが明確になり、
データを活かすAI活用への第一歩を踏み出せる状態になること

本日お伝えしたいこと

**AI Readyなデータ基盤構築のポイントは、
データを集約・整理することではなく、
業務フローの整理と知識の体系化にある**

アジェンダ①

生成AI・RAG導入が直面する「理想と現実」

生成AI・RAG導入における理想 vs 現実



生成AI・RAG導入におけるよくある理想と現実として、以下のような内容があげられます

	理想	現実
データ投入	社内データを全部入れれば OK 「社内WikiやPDFをとりあえず突っ込めば、完璧なアシスタントとして機能するはず。」	データの散在・形式もバラバラ 「ファイルサーバーにデータは大量にあるが、AIが処理できる形式になっておらず、結局一から整理が必要になる。」
精度・回答	文脈を理解した賢い回答が返ってくる 「優秀な社員のように、自社のルールに即した精度の高いアウトプットを出してくれる。」	期待しない回答やハルシネーション 「自社特有の言葉遣いや暗黙のルールを理解しておらず、使い物にならない。」
セキュリティ	見せていい情報だけを安全に回答 「役職や部門の権限に応じて、適切な情報だけをフィルタリングしてくれる。」	権限管理の複雑さで全社展開できない 「役員報酬や未公開情報など秘匿情報まで答えてしまうリスクにより権限管理が進まない。」
プロジェクト推進	最新AIによって一気に DXが進む 高性能なAIツールやモデルの利用によって業務が効率化する。	PoCの先に直面する現実 動くプロトタイプを作っていく中で初めて、自社に体系化された業務知識が存在しないという残酷な事実と直面。

多くの企業が陥るワナ



動くプロトタイプを作ってから初めて、その精度を上げていく課程で、必要な自社固有の業務知識が体系化されていないという事実直面します

1

「とりあえず全社データ」

- ・「データ量=AIの賢さ」という勘違い
- ・古い規定や表記ゆれの投入は、AIのハルシネーションの温床に

2

「暗黙知のまま AI化」

- ・担当者の頭の中にある「自社特有の定義」「例外ルール」が未言語化
- ・AIに判断させるための「参照すべき知識」が存在しない状態

3

「まず AIツール導入」

- ・ツール比較を優先し、中身のデータ整理を後回しにしてしまう
- ・ツール導入の前に「業務フロー整理」「ナレッジ棚卸し」が不可欠

アジェンダ②

「AI Readyなデータ基盤」への第一歩

ステップ1:業務フローの整理から



いきなり全社のデータを集めるのではなく、まずはAIを適用する業務の解像度を上げることが重要です

業務の棚卸し

1. **対象の選定**：頻度が高く、かつ自社特有の知識がボトルネックになっている業務(例：見積り、提案書作成など)
2. **プロセスの分解**：業務を「情報収集」「判断」「出力」の3ステップに分ける
3. **分岐条件の特定**：各ステップで「誰が・どんな情報をインプットに・どう判断しているか」を言語化する

「暗黙知」の可視化

- **マニュアルにない例外処理**：「長年の付き合いがある顧客には例外的に Bプランを提示する」といった属人的な対応。
- **ベテラン特有の違和感**：「この図面のこの数値は、過去のトラブル経験から危ない気がする」といった確認ポイント。
- **文脈による言葉の定義**：同じ言葉でも営業部と製造部で指している意味や粒度が異なるケース。

ステップ2: 業務知識の体系化



次に、スモールステップで形式知化を進めることが重要なポイントです

	進め方	ポイント
1 企業固有の用語集を作る	<ul style="list-style-type: none">・基準は「新入社員の頻出質問」・社内略語、製品名、業界用語を定義	<ul style="list-style-type: none">・必須4項目でAIの理解度が劇的向上（用語 / 定義 / 同義語 / 利用文脈）
2 既存の型を借用する	<ul style="list-style-type: none">・ゼロから作らない・一般的な業務フローや既存フレームワークを叩き台に	<ul style="list-style-type: none">・推進担当者が一人で抱え込まない・現場キーマンと一緒に自社の実態との差分をすり合わせ
3 自社独自のルールを言語化する	<ul style="list-style-type: none">・ベテランの暗黙知(判断基準)をテキスト化し蓄積	<ul style="list-style-type: none">・見つけ方のコツ 過去の「差し戻し履歴」「修正指示」に着目・書き方のコツ 「If～ Then～」の条件分岐で記述し、AIの迷いを防ぐ

【事例】属人化した見積り業務を、AIエージェント化した事例



「ベテランの頭の中」にある暗黙知を紐解き、AIが高精度な見積りの叩き台を作成できるようになった製造業様のケース

Before

- ・課題: 複雑な図面からの見積り作成が「ベテランの経験と勘」に依存
- ・PoCの失敗: 過去データの丸投げでは、社内略語や例外ルールをAIが理解できず頓挫

アクション
(ご支援内容)

ステップ1: 暗黙知の特定

図面の着眼点や危険素材など、独自の判断基準をヒアリング

ステップ2: 業務知識の体系化

- ① 用語集作成: 社内略語を定義(例: SUS=ステンレス)
- ② 型の借用: 標準フォーマット(材料/加工/組立費)に自社項目を適用
- ③ ルールの言語化: 条件分岐をテキスト化(例: 板厚5mm以上→特殊溶接追加)

After

- ・高精度な出力: 整理した知識をRAGで参照し、自社基準の見積り叩き台を瞬時に作成
- ・脱属人化: 若手でもベテラン水準の見積りが可能に。ベテランは高難度案件や最終確認に集中

アジェンダ③

実装・定着化に向けた「3つの論点」

論点1: プロトタイプによるスモールスタート



最初から完璧な状態を目指さず、プロトタイプによる「まず動かす」アプローチで必要なナレッジを特定・整理するアプローチが有効です

1

AIエージェントによる 検証

まずはClaude等のAIエージェントに既存データを入れて動かしてみる。
これにより自社のナレッジのどこが足りないかを特定します。

- ・AIの的外れな回答や一般論 => 自社特有のルール・前提条件が不足
- ・AIが判断に迷う箇所 => ベテランの経験則が隠れているポイント

2

参照用データの整理

抽出したナレッジを、AIが迷わず読み取れる形に整理します。

- ・階層と関係性を明確に: 見出し、箇条書き、表を使って構造化する
- ・判断基準をロジック化: 「If(条件) ~ Then(結論) ~」の形式で記述する

論点2: 推進体制の作り方



また、情シスやDX推進部門だけで推進すると、現場の暗黙知が抜け落ち、使えないAIになりがちです

業務を熟知している
現場のキーマンを巻き込む

AI基盤はIT部門で構築できますが、精度については現場にしか分かりません。業務を最も熟知したベテランなどのキーマンにプロジェクト初期から参画してもらいます。

IT部門と業務部門の役割分担

- ・IT/DX部門: AIツールの選定、データ参照環境の構築、セキュリティ権限の設定
- ・業務部門: 業務ルールの言語化、用語集の作成、AI出力結果の品質チェック

論点3:運用のルール整備



データ基盤は作って終わりではなく、使って初めて精度が上がるため、現場からのフィードバックをナレッジに還元する仕組みが必要です

精度の低い回答を
「知識の穴」と捉える

回答精度が低い時は、AIモデルの性能を疑う前に「どの業務知識が不足しているのか？」を分析するルールをチームで共有します。

フィードバックループの構築

現場からの「この回答は違う」「この用語の定義が変わった」という声を、即座にデータ基盤へ反映させるフローを決めておくことが、定着化の鍵です

本日のまとめ



1

データの量より知識の体系化

データの集約よりも自社の業務知識を整理し、形式知化することがAI Readyなデータ基盤において重要です

2

まずは業務の解像度を上げる

完璧なマニュアルを作ろうとせず、対象業務の選定から始め、用語集作成、型の借用、ルールの言語化のステップで小さく体系化を進めます。

3

定着・運用に向けた
「3つの論点」

1. ツール: 基盤構築の前にAIエージェントを活用したプロトタイプ検証
2. 体制: IT部門だけでなく、業務を熟知した現場のキーマンを巻き込む
3. 運用: 回答ミスを知識の穴と捉え、AIを育て続けるループを構築

サービス紹介

お客様のよくある課題



お客様のプロダクト・システム開発における、Quality(品質)・Cost(価格)・Delivery(納期)にお悩みはありませんか？

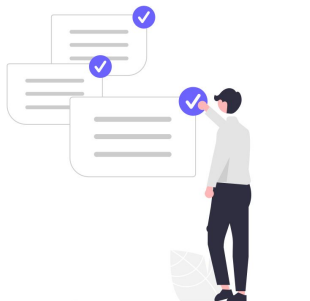
Quality(品質)

- ・要件の認識ズレによる品質低下
- ・不具合や技術的な拡張性の低さ



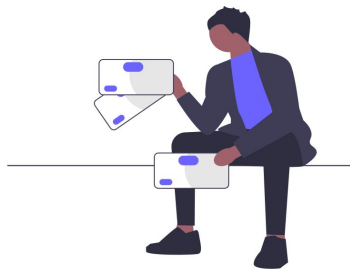
Cost(価格)

- ・工数拡大による予算超過
- ・仕様追加 / 手戻りによる費用増



Delivery(納期)

- ・スケジュール遅延
- ・仕様変更による進行停滞



事業内容



弊社は、お客様のプロダクト・システム開発における課題に対して、高品質・低コスト・短納期の開発/DX支援を提供いたします

高品質・低コスト・短納期の 開発/DX支援

IT事業会社出身のプロフェッショナルが、事業成果の創出をゴールDX・開発を伴走支援。さらに、標準化された開発アプローチにより、「高品質・低コスト・短納期(QCD)」を両立した支援を実現します。

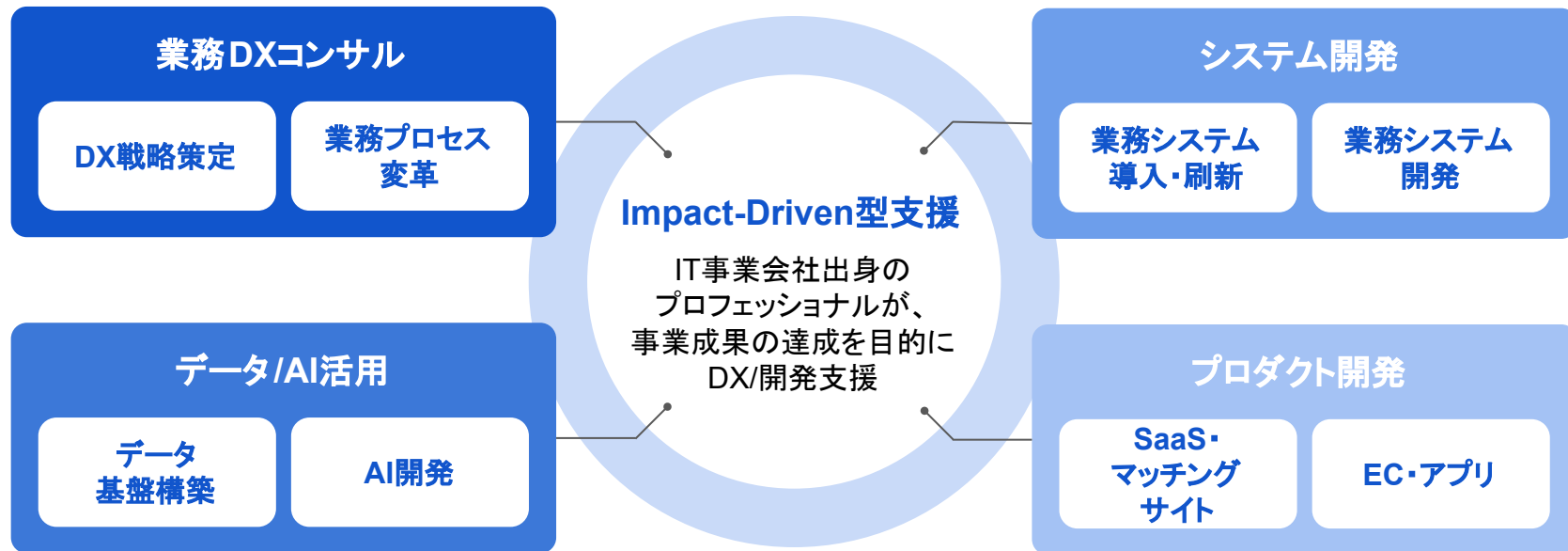


事業内容 ～Impact-Driven型支援～



IT事業会社出身のプロフェッショナルが、「Impact-Driven型支援」を通じて、お客様のDX/開発支援を成功へ導きます

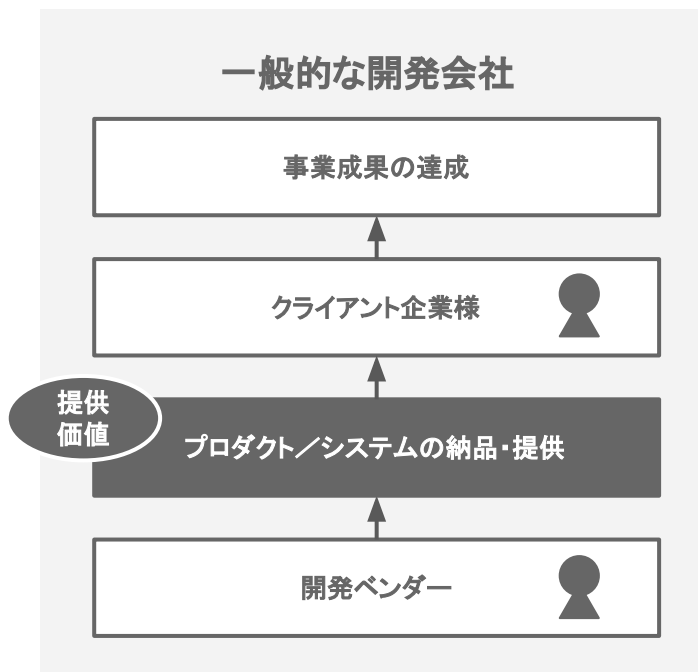
RIPLAが提供するサービス



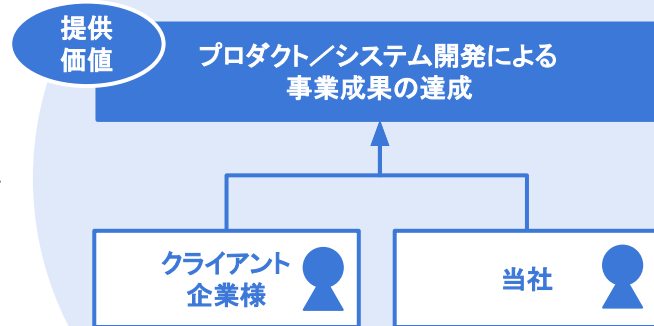
事業内容 ～Impact-Driven型支援～



「Impact-Driven型支援」では、プロダクトやシステムの納品・提供を目的とせず、お客様と同じ目線で、事業成果の達成をゴールとして、高品質なDX/開発支援をいたします



RIPLAの "Impact-Driven型支援"



事業内容 ～Impact-Driven型支援～



具体的な支援手法として、ユーザー価値や組織浸透性を意識した要件定義、中長期の拡張性や内製化を見据えたシステム設計により、事業成果を最大化いたします

事業成果を意識した要件定義

- ✓ 事業成果やユーザー価値を意識した製品の機能企画や UI/UX設計
- ✓ 現場業務や組織浸透性を意識したシステムの要件定義

中長期目線で柔軟なシステム設計

- ✓ 中長期の拡張性や運用を見据えたアーキテクチャ設計
- ✓ 将来的な内製化に向けた採用しやすい技術選定

“Impact-Driven型支援”により、事業成果を最大化

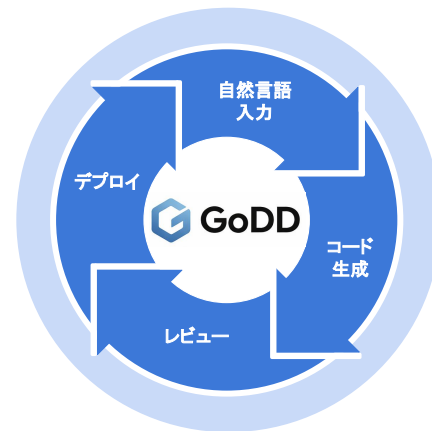
事業内容 ～Boxシリーズ×GoDD～



「Boxシリーズ」による標準機能の高速開発と、「GoDD」による独自機能のAI実装を組み合わせることで、低コスト・短期間で開発を実現いたします

Boxシリーズ

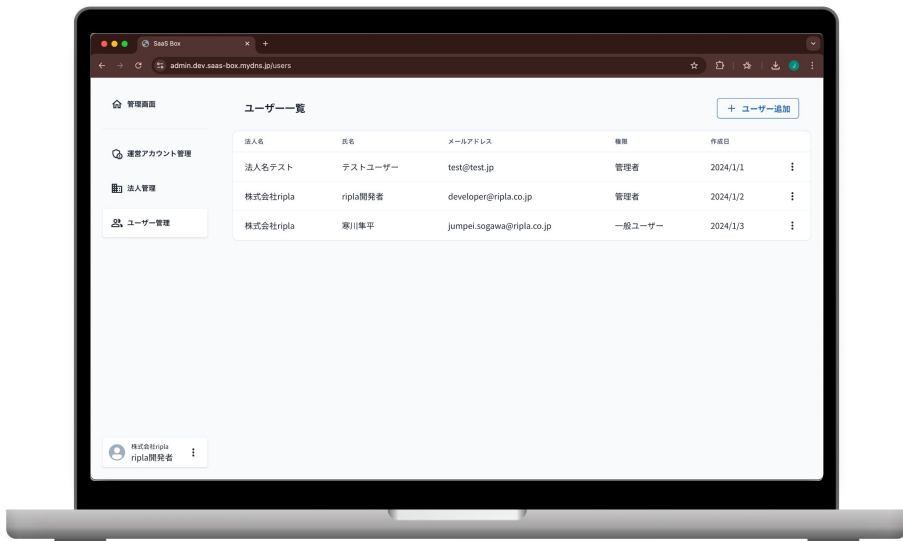
GoDD



事業内容 ～Boxシリーズ～



「Boxシリーズ」は、各プロダクト・システムに必要な標準機能を、モダンな技術と優れたUI/UXであらかじめ実装しており、そのままご利用いただくことが可能です



モダンな技術と優れた UI/UXで
標準機能を搭載

事業内容 ～Boxシリーズ～



各Boxシリーズに搭載されている主な機能は以下の通りです(一部抜粋)

<p>Box名称</p>	 受発注管理 Box	 在庫管理 Box	 配送管理 Box	 業務システム Box	 生成AI Box
<p>機能例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・マスタ管理 (受注/発注/商品) ・受注/発注管理 ・需給予測 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・マスタ管理 (出荷先/入荷元/商品) ・出荷/入荷管理 ・在庫管理 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・マスタ管理 (届け先/商品) ・配送管理 ・配送最適化機能 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理 ・権限管理 ・ユーザー向け画面 ・管理画面 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・AI チャット機能 ・RAG基盤 ・ベクトルDB基盤 ・検証用画面 ・バッチ処理 ・インフラ構築
<p>Box名称</p>	 SaaS Box	 マッチングサイト Box	 EC Box	 アプリ Box	 LINE Box
<p>機能例</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・法人管理 ・ユーザー向け画面 ・管理画面 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・マッチング機能 ・ユーザー向け画面 ・管理画面 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・マスタ管理(顧客/商品) ・受注管理 ・ユーザー向け画面 ・管理画面 ・インフラ構築 	<ul style="list-style-type: none"> ・ログイン機能 ・ユーザー管理/権限管理 ・プッシュ通知機能 ・アプリUI(iOS/Android) ・管理画面 ・インフラ構築 ・リリース申請 	<ul style="list-style-type: none"> ・LINEログイン ・リッチメニュー基盤 ・LINE配信機能 ・公式アカウント情報連携 ・ユーザー管理/権限管理 ・インフラ構築

事業内容 ～GoDD～



「GoDD」は、人間の意思決定を中心に開発フロー全体を効率化するAI駆動開発フレームワークで、各プロダクト・システムに必要な独自機能の開発を高速化いたします

GoDD AI

開発プロセスを自動化する
強力なAIエージェント



...を実装して



自然言語入力 コード生成 レビュー デプロイ

自然言語で
指示するだけ

GoDD Notes

仕様書をベースにした
コラボレーションツール

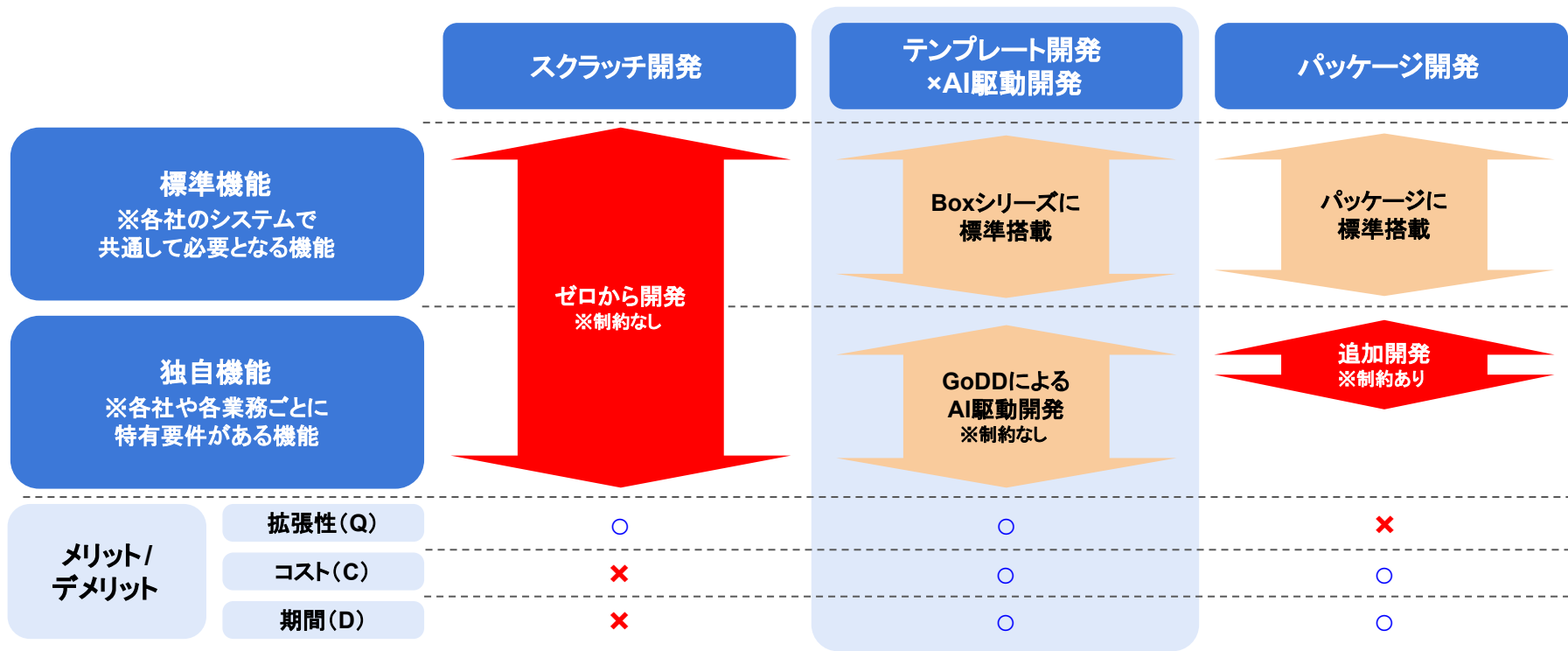


...を~したい

事業内容 ～Boxシリーズ×GoDD～



テンプレート開発(=Boxシリーズ)とAI駆動開発(=GoDD)を併用することで、Q(拡張性)
・C(コスト)・D(納期)の三点両立を実現いたします



RIPLAの対応技術



AI・モダンな技術・クラウド型・APIなどの最新技術を活用することで、新規性のある取り組みや、拡張性や柔軟性の高い開発に対応可能です



AIを活用した業務効率化や 新たな価値創出

AI技術を活用することで、業務プロセスの自動化、レコメンド機能、自然言語処理、画像解析などが可能になります。



モダンな技術を活かした 高品質な開発

最新のモダン技術を活用することで、ユーザビリティの高いUI/UX設計、保守性の高いアーキテクチャを実現します。



クラウド型で拡張性のある システム構築

クラウドインフラを活用することで、柔軟かつ拡張性の高いシステムを構築し、初期投資を抑えることも可能です。



API連携による柔軟な 外部サービス連携

外部システムやSaaSとのスムーズな連携を前提としたAPI設計を行うことで、機能追加や業務連携が容易になります。

RIPLAの対応技術



また、お客様のニーズに応じて、幅広い技術を取り扱うことができます

フロントエンド



バックエンド



AI関連



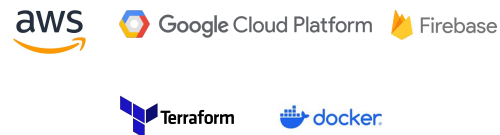
アプリ



DB関連



クラウド技術・その他



これまで多数の業務DXコンサル、データ/AI活用、システム開発、プロダクト開発の支援実績がございます

業務DXコンサル

- ・販売 / 顧客管理システムの刷新
- ・大手建設企業のDX戦略策定
- ・金属商社企業の基幹システム刷新
- ・広告SaaSのマルチプロダクト構想策定
- ・印刷EC新規事業の構想策定など

データ/AI活用

- ・訪問看護のAI FAQシステム
- ・AIデータ分析SaaS
- ・ホテル向けのデータ基盤構築
- ・AI画像解析による商品棚在庫管理
- ・コーチングのAIチャットボットなど

システム開発

- ・物流系WMS / OMS
- ・ガソリンスタンド受発注管理システム
- ・営業ナレッジマネジメントシステム
- ・訪問看護のスケジュール管理システム
- ・ドローン機器管理システムなど

SaaS

- ・研修管理 / 学習管理SaaS
- ・LINEチャットボットSaaS
- ・SFA / CRM SaaS
- ・設備保全管理SaaS
- ・採用管理SaaS など

マッチングサイト・EC

- ・インフルエンサーマッチングサービス
- ・求人検索メディア
- ・美容師マッチングサービス
- ・ビジネスマッチングサービス
- ・オンラインチケット販売EC など

アプリ

- ・献立共有アプリ
- ・旅行ガイドブックアプリ
- ・医療用スマホアプリ
- ・スポーツゲームアプリなど



RIPLA